インタビュー

「木を使うことが地球温暖化防止につながる」徹底してPR

木材関連業界全体の地位向上実現へ

創業50周年記念事業も

日本木材青壮年団体連合会会長 角博氏

日本木材青壮年団体連合会は今年、創立50周年を迎える。この節目の平成18年度会長に就任したのが角博氏（福岡県、九州木材工業社長）。既に法人を対象とする賛助会員制度の新設を決めるなど、今年度は一般向けに「木を使うことが地球温暖化防止につながる」ことを分かりやすく伝え、木材関連業界全体の地位向上を実現する端緒の年にしていく考えだ。テーマは「誇り高き、木の時代」。角会長に今年度木青連の事業方針を聞いた。

――保険会社勤務から木材業界に入った異色の会長となりましたが――

実は4～5年前まで「木青連って何をやっているところだろう」と思っていた。だが活動に参加していくなかで、今は「こういった団体を絶対になくしてはいけない」という思いに到っている。

木青連はこれまでも素晴らしい活動を行ってきた。全国児童・生徒木工工作コンクールには毎年4万～5万点、設計士を対象にした木材活用コンクールには毎年100～200点の応募がある。「子供たちに贈る森からの手紙」製作、また林野庁の木づかい運動には企画段階から参加している。地域でも地道な木材普及活動及び研修会などを実施している団体は多い。

ただ、こういった活動は「既に木材が好きな人」を対象に将来への基盤を固めるためのもの。そのうえで今から行うべき活動は「木材が嫌いな人、あまりよく知らない人」に対し「木材を使うことが地球温暖化防止につながる」ということを分かりやすく説明し、木材関連業界全体の地位向上を実現することだと思う。それには個々の企業の努力では限界がある。日木青だからこそできることだ。

――具体的には――

まずは足元から。実は会員企業の社員でも「木材を使うことが地球温暖化防止につながる」ということを分かっていないと思っているし、既に同様の活動をしている会員もいる。

そのうえで木青連では今年度から賛助会員制度を新設した。これは一般法人を対象にしたもので、現時点で銀行、保険会社、機械メーカーなどに参加を呼び掛けている。木青連のグッズ贈呈、また研修・勉強会などに参加してもらうことで、木材を利用することがいかに環境に貢献することになるかを理解してもらうのが目的だ。もちろん大会や理事会などで企業PRもしていただくし、環境に貢献する姿勢が企業ステータスの向上にもつながると考えている。

一方、細かい部分ではホームページ「木魂21」を一般消費者向けに改善、機関誌「ウッディレター」もA4判カラーの読みやすいものにリニューアルする。大会などに著名人を呼ぶなど一般から参加しやすい形を模索する。

――他に新規事業はありますか――

褒賞特別委員会を新設した。これは各地域会団が普段行っている活動を全国から集め、プレゼンテーション及び審査を行い表彰するもの。狙いは外部関係者に見てもらうことで、活動に広がりを持たせること。また活性化特別委員会では先述の社員教育とともに、各会団に木青連への意見、提言書を提出してもらい、今までのやり方で見直すべきところは改善していく。

そして1956年10月13日に創設された日木青が今年50周年を迎えるにあたり、今年10月に記念祝賀会及び事業を大々的に実施する。先輩諸氏、また一般を含め、多くの方々に参加してもらいたい。

――改めて今年度の抱負を――

林野庁のデータによると20～30代の若者の半分以上が「木を切るのは環境に悪い」と認識している。だからいまだに切り株が泣いているポスターなどがあるわけで、この誤った認識を覆すことこそ連合会としての木青連の役割だと思っている。

「木を使うことは地球温暖化防止につながる」という考え方を一般に植えつけることが重要だ。これを日木青がやらずして誰がやるのか、そういう気持ちで取り組む。全国8ブロック、51会団、1300会員とその社員10万～20万人が1つの目標に向かい一丸となって動いていきたい。

平成18年度日木青の主要役員

役職	地区	会団	氏名
会長	九州	福岡	角博
直前会長	東北	岩手	日當和孝
代行副会長	九州	大分	瀬戸亨一郎
副会長	東海	岐阜	小牧弘二
副会長	近畿	大阪	島津浩之
専務理事	九州	福岡	中川裕敬
監事	関東	東京	高瀬義則
監事	東北	青森	斎藤渉